

コロナ禍では持ち物を他人のものの近くに置きたがらない

郭 雯¹・池田 鮎美²・高嶋 魁人¹・益田 佳卓¹・植田 航平¹・有賀 敦紀³・佐々木 恭志郎⁴・山田 祐樹¹
(¹九州大学・²北海道大学・³中央大学・⁴関西大学)



論文

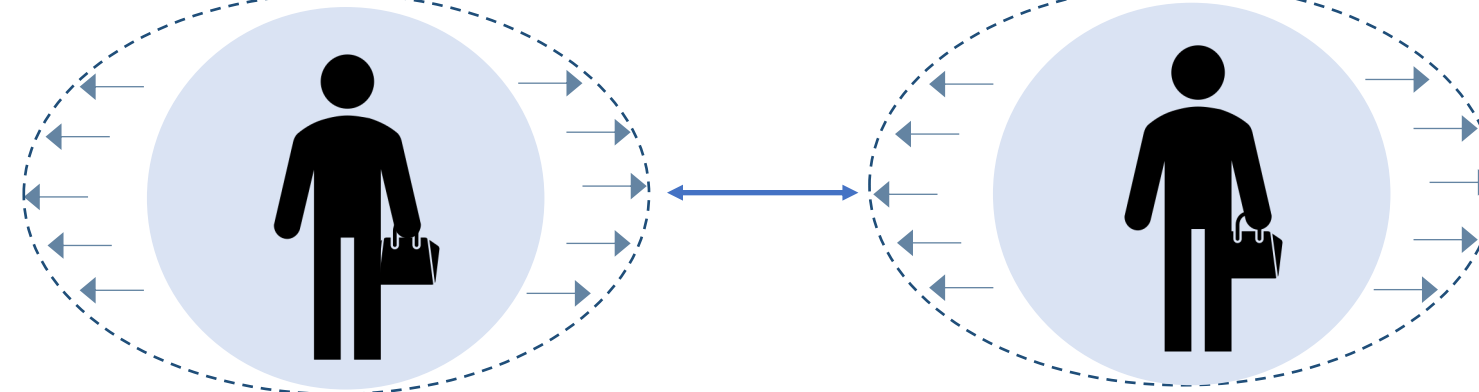
Introduction

社会距離拡大戦略



- COVID-19流行への対策として、一定の物理的距離を保持することが求められた (ソーシャル・ディスタンス)

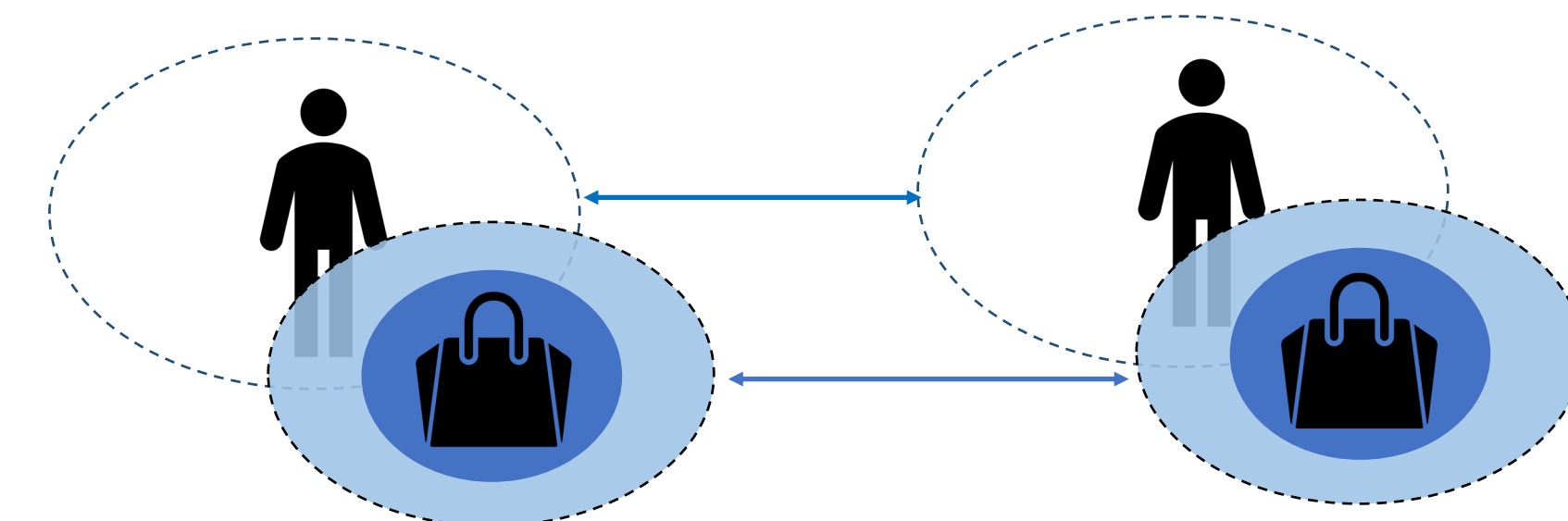
Personal space (PS) の拡大



- 対策継続により、物理的距離だけではなく PS の境界も拡大した

(Welsch et al., 2021; Holt et al., 2022)

所有物への拡張PSの距離



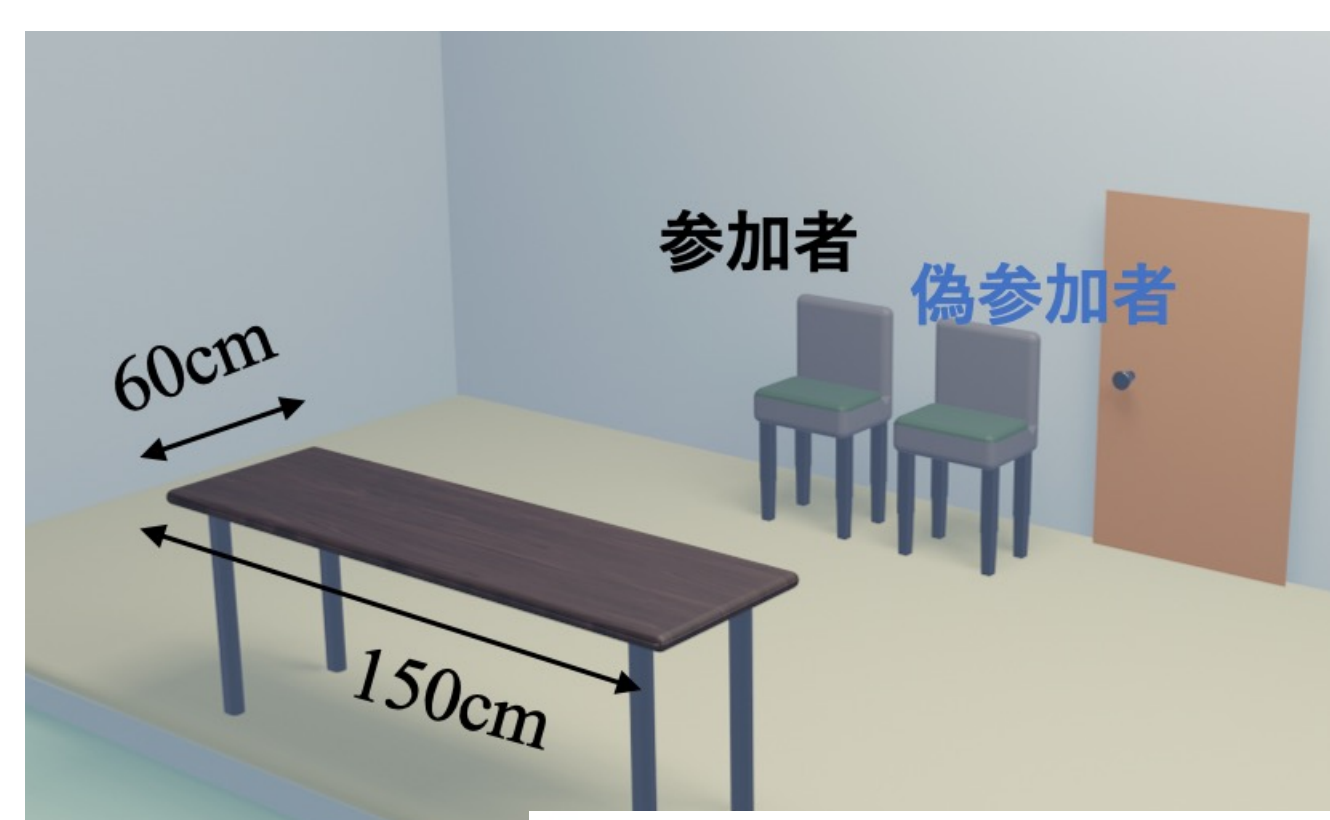
- 人は自己と他者のPSを、自己の拡張である所有物にも反映する(拡張的PS)

(e.g 有賀, 2016)

目的： COVID-19流行下における所有物間の距離が流行前に比べて変容したのかを検討する

予測： 長期的に社会的距離を保つことは、個人のPSを拡大させる可能性がある
→ 所有者の対人関係に基づいて所有物にPSが反映されるのならば、持ち物間の距離は流行前と比較して流行下で長くなる

Method



実験時期：2022年6月-2023年1月

参加者：大学生68人，男女比1:1，平均年齢21.0歳

手続き：有賀 (2016) の手続き (実験的操作を含む) を踏襲した

➤ 実験者，参加者，偽参加者の3人で実施

① 参加者は待合室に案内され，偽参加者が着席済みの席の隣の席へ座り，待機

② 友好条件：参加者と積極的に雑談 or

非友好条件：参加者の会話を無視，約15秒ごとにため息

③ 1分後，参加者と偽参加者は，真正面のテーブルに持ち物を置いて，実験室に移動

④ 実験室で：ダミータスク，実験の同意確認，偽参加者への好意度評価 (1:悪い～10:良い) を実施

⑤ この間に実験者が2つの所有物間の最短距離 (cm) を測定

OSF事前登録



Result

確証的

- 所有物間の距離 (Welch の t 検定):

COVID - 19 流行下 > 流行前, $t(105.63) = 5.88, p < .001$, Cohen's $d = 1.10$

($M = 43.6 \pm 25.0$)

(有賀, 2016; $M = 20.6 \pm 15.6$)

→ 予測と一致!

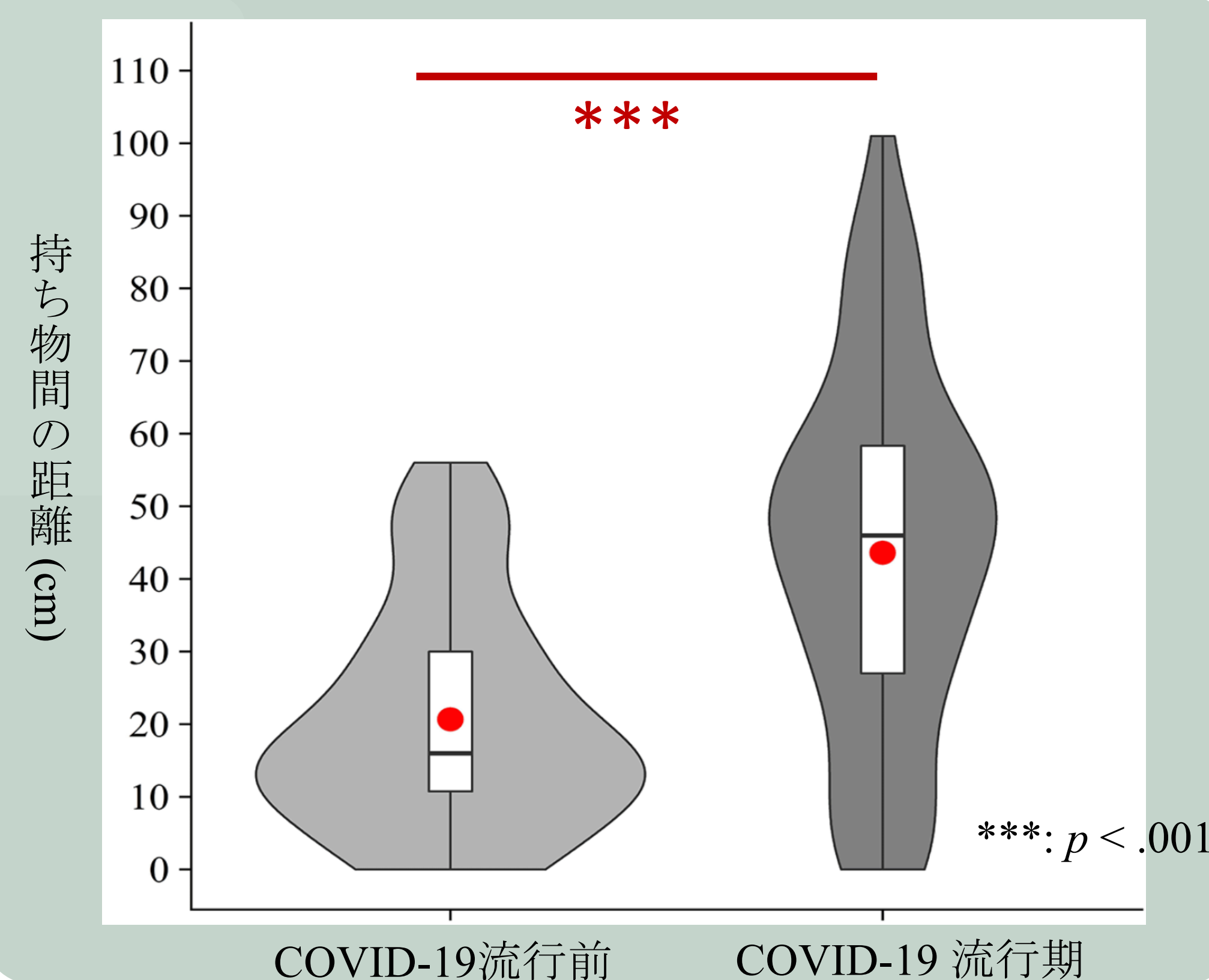
探索的

- 好意度：友好群 > 非友好群, $t(65.76) = 8.54, p < .001$, Cohen's $d = 2.07$
- 所有物間の距離 (2×2 分散分析):

実験時期の主効果が有意であった ($F(1, 104) = 27.39, p < .001, \eta_G^2 = .21$)

友好条件の主効果 ($F(1, 104) = 1.66, p = .20, \eta_G^2 = .02$)

要因間の交互作用 ($F(1, 104) = 0.85, p = .36, \eta_G^2 = .01$) } ns



Discussion

COVID-19流行下で所有物間の距離が拡大したことを示唆

可能性 1

ソーシャル・ディスタンスの習慣化により対人距離や PS が拡大
→ 拡張的 PS にも反映された

可能性 2

病気に対する脆弱性の認識が敏感化
→ 感染源となりえる他者の所有物を自分の所有物から遠ざけた

探索的分析について

有賀 (2016) の報告と一致しない
→ 天井効果の可能性

※ テーブルの長さ150cmは平時において十分な長さだが，大流行時には足りない可能性